『週刊ポスト』2018・4・2（月）発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第29回 『進め！ジャガーズ……』と一人女性GS・中村晃子

今からちょうど50年前の昭和43年3月30日に封切られた『進め！ジャガーズ　敵前上陸』は荒唐無稽なGS（グループサウンズ）映画の中でもとびきりカルト色濃厚の怪作コメディーですが、この映画を魅力的にしている大きな理由の一つに、はたちになったばかりの中村晃子の存在があります。

中村は15歳のとき、ミス・エールフランスの準ミスに選ばれて松竹入りし、17歳で富永一朗の漫画『チンコロ姐ちゃん』を映画化した『ちんころ海女っこ』の主役を演じていますが、中学生だった私は観に行くことができませんでした。

そのかわり、愛川欽也とのコンビで吹き替えに挑戦した米国製テレビコメディー『かわいい魔女ジニー』を毎週楽しみに見聞きしていました。ジニー役のバーバラ・イーデンのへそ出しルックが「海女っこ」のへそ出しを連想させたことからの声優抜擢だったのかもしれません。人生に無駄なしです。

『進め！ジャガーズ～』出演まで、中村はすでに27作ほどの松竹映画に出演、歌謡青春映画の経験もあり、前年、昭和42年10月に発売した第7弾シングル『虹色の湖』が大ヒットし、第8弾『砂の十字架』もヒット中の時期とあって、歌も演技も輝いています。

映画の中ではジャガーズをバックに『虹色の湖』を歌っていますが、中村はデビューからすでにシングル盤6枚を出していて、2枚を除き「詞・横井弘、曲・小川寛興」という大正生まれのベテランコンビの作品でした。

あいにくヒットに恵まれず、『虹色の湖』から方針変更されたことが2点ありました。シングル盤のジャケットから笑顔が消えたことと編曲に森岡賢一郎を登用したことです。

アイドル風の作り笑いを断つことでイメージチェンジを図り、おそらく作詞の横井弘は、アルト音域の黛ジュンの『霧のかなたに』の歌詞を参考に、都会に出て行く男と女の立場を逆転させた物語に仕立てたのでしょう。

編曲の森岡は、半年前に担当した『ブルー・シャトウ』を筆頭に大ヒットを連発、余勢を駆って、『虹色の湖』にはGSソングのヒット要素をたっぷりと詰め込みました。

ブルコメを思わせるイントロのドラムスとエンディングのメジャーコード化、リードギターにからむストリングス、リズムセクションが4拍子を刻むサビ等々、黛ジュンと並ぶ「一人女性GS」の中村にふさわしい、GS時代を代表する名曲に仕上げています。

GSがピークを迎えた昭和43年、夏のヒットチャートを最もにぎわせたのはピンキーとキラーズの『恋の季節』（作編曲・いずみたく）でしたが、『進め！ジャガーズ～』の音楽も担当していたいずみの脳裏には、ジャガーズを従えて歌う中村の『虹色の湖』があり、キラーズが奏でる『恋の季節』の前奏でオマージュを捧げた、と私は思っています。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。著書に『私的「昭和大衆歌謡考」』第1～3集（グスコー出版）がある